芥川龍之介の小説「トロッコ」の基礎的研究

――素材提供者・力石平蔵をめぐって――

石井茂

一　芥川の小説と力石平蔵

芥川龍之介の「トロッコ」（大正一一・三「大観」）「百合」（大正一一・一〇「新潮」）「一塊の土」（大正一三・一「新潮」）の現代小説三点は、湯河原の人、力石　某による素材提供であるということは、滝井孝作の「純潔」（昭和二六・一「改造」）に明示するところである。しかし、その力石　某なる人物についてはまだ明らかでない点が多い。本稿では「トロッコ」に重点をおきながら、その人物を解明し、芥川との関係、予想される提供した素材、芥川による形成のすがたなどを考えてみたい。使用本文は筑摩書房版・芥川龍之介全集を用いた。その「書簡」の大正一一年の部に、佐佐木茂索宛のものがある。「拝啓　その後ボクも大芸先生にかぶれ、今夜一夜に小説一篇を作った。岡の為に大観へのせるつもり…」とある。（「大芸先生」―佐佐木茂索。「岡」―劇作家で芥川の親友岡栄一郎。「大観」―大隈重信主宰の総合雑誌、大正七・五～大正一一・四、評論の外に創作もあり、鷗外・藤村・日夏・八十なども執筆。）これによると芥川は大正一一年二月一六日の夜に、一夜で小説一編を書き上げ、「大観」に載せる予定というのである。そこで「大観」の三月号を見ると、戯曲として岡栄一郎の「意地」、小説として室生犀星の「心臓」と共に芥川の「トロッコ」が発表になっている。二月一六日の一夜で書き上げたのが「トロッコ」だということになる。この「トロッコ」の初刊のものと今の全集版の本文とを対比してみると、「良平は顔に吹きつける日の暮の風を感じながら殆んど…」（全集本）が「良平は顔に當る薄暮の風、足下に躍るトロッコの動揺―良平は殆んど…」（大観本）となっているだけで他はほんの辞句の違いが数個所に見られるだけである。そこからこの一夜づけの仕事を相当に出来のよいものと自己評価していたと思われる。慎重で遅筆家として有名な芥川にしては珍しいことで、何か原拠作品でもあったろうという予測が可能になる。また、この作品末の「良平は二十六の年、妻子と一しょに東京へ出て来て…塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに薄暗い藪や坂のある路が、細々と一すぢ断続してゐる…」の部分には、いろいろな意味づけが考えられるが（後で問題にする）、吉田精一氏の「これは材料を提供してくれた力石青年への挨拶かも知れない」(1)という見方も可能で、そうとれば自ら種あかしをしたことにもなる。また、発表直後、宇野浩二は「『トロッコ』が大正十一年の三月号の『大観』に出た時も、私は『これは…』と思った。これはとは、これは芥川の作品らしくないという意味である。」(2)と直観し

たという。また、この大正一一年の著作を概観するに、「俊寛」「藪の中」「六の宮の姫君」「お富の貞操」など、古典物や歴史物に傑作が多く、現代物は断片的スケッチ風で、軽いタッチのものの多い中で、「トロッコ」「百合」の二点は、同一名の田舎少年のある日の出来事を描いた回想として異色があり、宇野ならでもおや？　と思わせられる。

さて、この小説が湯河原出身の力石　某による素材提供に成るということを、最初に明らかにしたのは、滝井孝作の前記「純潔」である。その滝井は田端の芥川邸に近く居住し、当時、佐佐木茂索・小島政二郎・南部修太郎などと共に、「龍門の四天王」と称され、芥川とは格別に親しかった一人である。その「純潔」の一節を引用しよう。

ついでにこの時分、芥川さんは他人の材料で書く癖も二、三あったやうで、大正十年(ママ)三月に出た田舎風景の「トロッコ」、これは、芥川さんは私に向いて、「力石君から貰ひ受けた五、六枚の原稿で書き改めたのだが、力石君はトロッコの出たのを読んで、ひどく悄気てゐた。永久に俺のぢゃ無うなった、と言ってネ、大事な掌中の玉を奪はれたやうにネ」と話し、その湯河原から出て、某社の校正係と言はれる力石青年は、控へ目なおとなしい人で、その時分澄江堂連中の一人でした。また、十三年一月に出た百姓女を描いた秀作「一塊の土」も湯河原生れの力石君の協力した材料のやうでした。この青年とは格別の間柄であったのでせう。ふかい親し味があったからこそその材料を採り上げて製作されたわけで……。

とあり、この「力石君」とは次章で明らかにしようとする「力石平蔵(りきいし)」のことであり、右の文章から明らかになることは、「五、六枚の原稿」が一二、三枚（字数計算の結果）に書き改められ、その性格は「控へ目でおとなしい人」であり、当時芥川の友人文士と同じように「澄江堂連中の一人」として「格別の間柄」であり、そこには「ふかい親しみがあった」らしく、そんなわけで好意的に材料の提供があったらしいと、滝井は推測している。また、「一塊の土」もそうらしいと。さて、そうして出来た「トロッコ」が、なぜ力石平蔵にはひどく不満に感じられたのであろうか。まず、力石平蔵の人物像を解明することから始めよう。

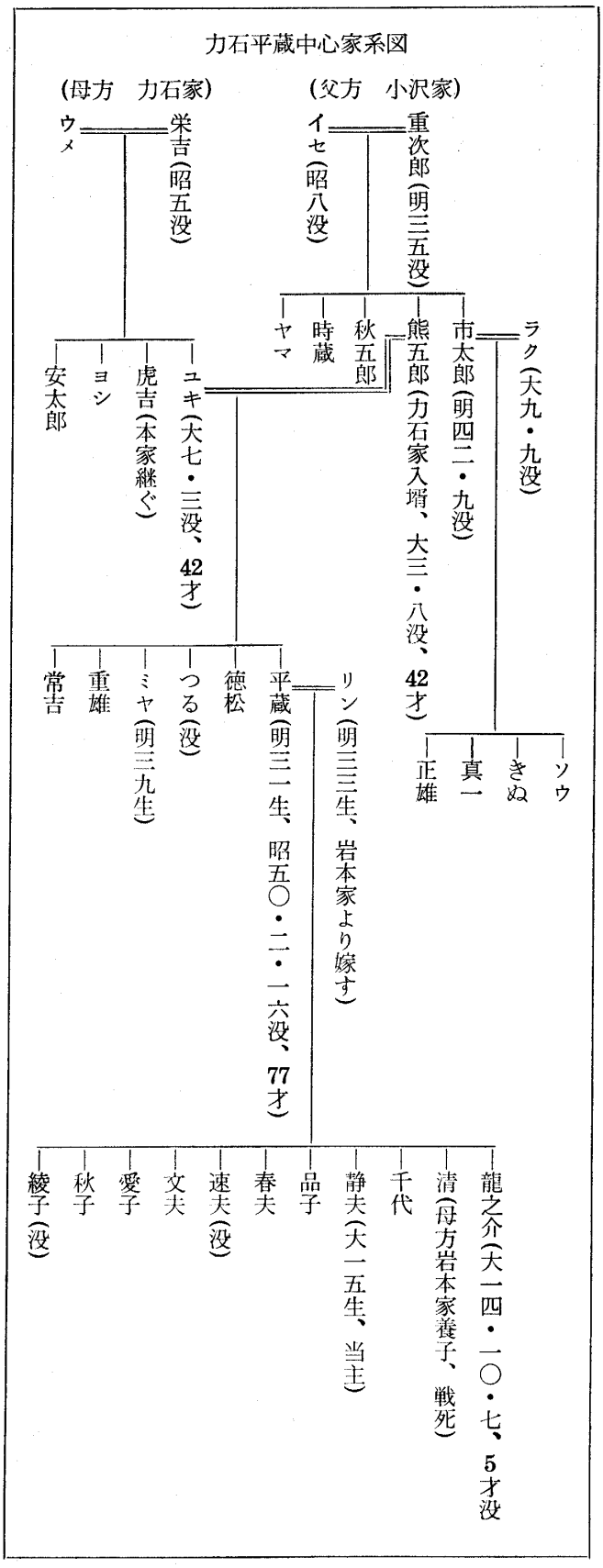
二　力石平蔵とはいかなる人か

湯河原町吉浜に筆者の古い学友で蜜柑山を経営する力石(ちからいし)久次君という人がいる。本年三月ごろ、芥川の「トロッコ」その他二編に材料を提供したと言われる力石某なる人（実名を明記した著書を筆者は未だ知らない）について、その身元調査を依頼した。ところが四月一日付で、同君から「力石某なる人につき、星崎茂兄〈注、この人も筆者の古い学友で現湯河原中学校長〉とも会っていろいろ話し、吉浜の力石姓で、これはと思うところを折にふれ聞いてまわりました。偶然にも昨三十一日該当の方を見つけました。力石平蔵と言って、すでに数年前に死去されていますが、家族の方のお話では間違いないとのことで、妻にあたる方は高齢ですが……」と言う朗報が入った。そこで予め聞きたいことを書き認めて先方に送っておいて四月二十日同君の紹介でその平蔵の生家「湯河原町吉浜四二九（字名は川堀）の力石静夫氏（平蔵の三男で嗣子、大正一五年生まれ、現在力石工業所という建設関係の会社経営）を訪問し、長時間にわたり同氏と平蔵の妻リンさん（旧姓岩本、明治三三年生まれ八〇歳）と面談した。その際、平蔵には生前唯一の懸賞小説があり、題名は「親子」？「母と子」とか？、出版誌は「文芸春秋」と聞いて帰り、国会図書館で調べたところ大正一五年二月号「文芸春秋」に力石平三の名の「父と子と」という小説を見つけ、それにかか

わる質問事項をまた予め送っておいて五月一八日第二回目の訪問をした。この時は静夫氏・リンさんの外に平蔵の八歳年下の実妹ミヤさんも同席され、長時間にわたり面談し、平蔵について、芥川家との関係や、その他旧吉浜村の往時の様子など、次に述べるようにいろいろ参考になることを聞き得た。次は静夫氏作成の平蔵中心の家系図である。

力石平蔵（平三、平造などとも。平蔵が正式と言う）は、明治三一年、小沢家から入婿した熊五郎を父とし、母ユキとの間の六人の子の長子として出生。地元の小学高等科卒業、その成績は常に上位一、二番で、大の読書好き、小卒後しばらく家業の石切り（附近一帯は小松石の産地）を手伝った。一四歳の大正三年八月、石切りの石粉により肺をいため長らく温泉療養などしていた父が四二歳の若さで没し、ついで四年後の大正七年一二月には母も四二歳で没した。父の生家は吉浜の小沢家で屋号を提灯屋といい、力石ユキと結婚し一戸を設け、力石家から分家し石切りを家業とするが、その石粉の肺に害あることを身をもって体験し、わが子平蔵には農地を買い求め農業に転換をはかっておいたと言う。平蔵の実妹ミヤさんの言によれば、子供の頃は日露戦争による戦死者の墓石などの需要があって現金収入も多く、家計も豊かであり、両親の印象として特に目立った点はないがおだやかでやさしかったと言う。しかし母亡き後の兄平蔵の行状には変化が目立ち、家業はなおざりにして好きな文学方面に傾斜していったと言う。長男として下に

力石平蔵中心家系図



五人の弟妹をかかえ、父を十四歳、母を十八歳で失った平蔵は、大きなショックを受けたのである。二十二歳ですぐ近くの旧家で素封家の岩本家の娘リンさんと結婚する。かの女は明治三三年生まれで二歳年下、東京の渡辺裁縫女学校（今の大妻女子大の前身）を卒業し、その点では村でも珍しいハイカラな女性。そして、二人の間にはいつしか愛が芽ばえ、かの女の親たちは文学好きであまり家業に専念する気配もない平蔵に信頼がおけず、この恋には反対であった。そこで二人は手をとり合って恋の駆け落ちをして上京したのである。一時、女学校時代の友人の家の六畳間を借りて入居し、リンさんは裁縫の内職を、平蔵は出版社などに勤めて生計を立てたと言う。リンさんの記憶ははっきりはしないが大正九年ごろのことらしい。芥川の書簡の一部に「：：今人が来ましたから駄弁はこのくらいできり上げます。今来た男は二、三年前、細君になるべき女と共に僕の所へ駆け落ちして来た男であります。但し甚善良なる田舎者であります。」(3)とあり、その日付が大正一二年四月二七日であり、それより二、三年前にさか上るので、この男は平蔵であり、駆け落ちして一身上の相談を芥川に持ちかけたのであろう。平蔵の妻も妹も、平蔵は芥川小説のファンであり、結婚前から芥川家に出入りしていたと語る。熱烈な衝動に駆られて自宅に押しかけたのか。ある親戚の言によると他の作家を訪問途中、愛読する作家芥川の家を偶然に見つけて訪問したとも。いずれにせよ小説のとりもつ縁であったらしい。翌一〇年には長男が生まれるが、その子に「龍之介」と芥川の実名をそのままつけている。芥川の許可を得たかどうかは近親者でもさだかではないが、平蔵の狂気じみた芥川ファンぶりを物語っていると解される。（妻リンさんも田端の芥川家に出入りしているところから、無断でつけては発覚した場合、具合が悪いので願い出して許可を得たものと思われる。）自宅の裏山の中腹の共同墓地に、平蔵建立の分家力石家の墓がある。立派な石塔が二基あり、一基は両親のもの、一基は大正一四年一〇月七日五歳で夭折したこの長子龍之介のものである。戒名は「龍介禅童子」。自分の文学志望の志を継いでくれ、吾子よ、あの芥川龍之介のごとく偉大な作家となれ、という悲願からの命名であろうが、それもむなしく、平蔵の無念悲嘆のほどはいかばかりであったかと察せられる。

また、同じく芥川の書簡の中に左のようなものがある。

拝啓　その後御変りもない事と存候、さて小生の所へたよって参りたる田舎青年あり、就職口をさがし居り候へども御店にて使って頂くわけには参らず候や、年二十五、神奈川県人、学歴は小学校だけ、機敏といふ訳には参らねども正直にして善良なる事は小生の保証する所なり体は丈夫故算筆の外にも労役出来可く候唯夜だけにても暇ある事必要の由、すでに妻子あれば勿論通勤するわけに候何とかロの御周旋を賜らば幸甚につき右御願申上候　頓首

三月二十二日　　芥川龍之介

山口貞亮様

この青年は過日申上候書生の件とは別に候

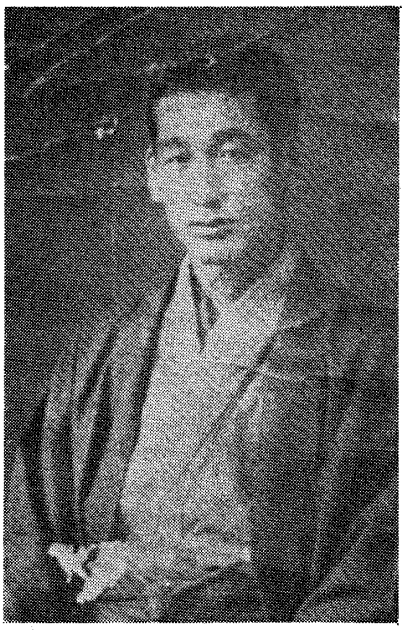
右の山口なる人はいかなる人物かは不明。日付は大正一一年三月二二日である。どの条項から見ても平蔵であることはまちがいない。力石静夫氏に問うたところ、まちがいなく父であると即答した。その就職口の世話にこんな丁重な手紙を認めているところから、その間柄の並み並みでなかったこともわかると共に、「トロッコ」の執筆が大正一一年二月一六日で、その時点では「ある出版社の校正係」を勤めているところから、その後すぐその出版社を辞めて、三月二二日には芥川が彼の就職口探しに奔走していると解される。察するにその校正係

もほんの一時凌ぎの臨時雇程度のものであったろう。「今でもやはりその時のように薄暗い藪や坂のある」ような「細々と一すぢ断続してゐる」道とあるのも単なる文飾ではなく、現実の実態であったと解される。その出版社をある人は「改造社」と言い、リンさんの記憶では「人間社」と言う。さだかではない。

芥川は病気療養のため、湯河原の温泉旅館中西屋にしばしば来ている。大正一二年には三月一六日から四月中旬まで、大正一五年には一月一五日から二月一九日までというように、一ヶ月以上にわたる場合もある。そんな時、平蔵は家業などは二の次にして旅館に出向いて、自弁で泊まり込み、いく日も芥川の側で相手をしていたと、リンさんは語る。また、鵠沼の東屋旅館の貸別荘に長逗留することもあり、夫人芥川　文さんの著書(4)の中にも、

大正一五年四月主人と私は、三男の也寸志を連れて鵠沼の東屋旅館に主人の病気静養に行きました。五月五日の端午の節句は也寸志には初節句になりますので、田端の家に帰ることになりました。主人はその時腸をこわしていたので気になりましたが、ちょうどその時、農家の人ですが、文学好きな力石平三さんという方が訪ねて来られたので、力石さんに泊って頂くようにお願ひして私は東京へ帰りました。……

とあり、平蔵は芥川家にとっては気楽に雑用をも弁じてくれる便利重宝な存在でもあったようである。ただ「力石平三さんという方」の「いう」が気になるが、私的関係の人を広く披露する場合、こんな距離を設けた言い方をすることもあるようである。さらに深い関係にあったことを示すのは、平蔵が実妹二人を含め四人も芥川家に手伝い女中を世話していることである。大正一一、二年ごろの芥川家の手不足ぶりは、芥川の書簡(5)に「数日前の小生の家族の健康如左、主人神経衰弱、胃痙攣、腸カタル、ピリン疹、心悸昂進。妻産後、脚気の気味あり。長男虫歯（歯齦に膿のたまる）。次男赤ン坊ナリ、消化不良。父胆石、胃痙攣。母足頸の粘液とかが腫れ入り切開す。これでは小説どころではないでせう。」と記す。一家中病人だらけ、しかも田端の家は養父道章が役人在職中の余裕ある頃の建築で、十三の部屋数を有する広さであり、管理も大変で、芥川の文名にふさわしく友人・門人・出版人などの訪問も多く女中を不可欠としていた。親友小穴隆一宛にも「女中の件につきいろいろ御配慮に預り……」（大正一一・五・一〇）「冠省　女中の事につきいろいろ御世話に相成り……」（同年五・二〇）などと書いている。ミヤさんの記憶では、芥川家に行ったのは、一七、八歳ごろで、比呂志さん五歳ごろ、多加志さん三歳ごろ、也寸志さん誕生前と言う。大正一二、三年ごろか。今も印象に残るところは、芥川はその伯母さん（実母の姉フキ）をひどく尊敬していたこと、奥様のお父さんは海軍の将校で日露戦争で戦死され（戦艦初瀬に第一艦隊参謀少佐で乗り組み、明治三七年五月旅順近海で撃沈されて戦死）その実家に奥さんのお伴をし多加志さんを連れて行ったこと、小島政二郎さんからのハガキをちらっと見たら、「トロッコ」の末尾が気に入らないと言う旨の文言があったこと、芥川から湯河原の地の言葉ではこうこうするのは何と言うのかとたずねられたこと、兄平蔵もたまには訪問があったこと、また、ミヤさんは姉のつるの代わりに行ったこと、リンさんのいとこのミツさんや、村のだれそれさんも行っていたことなど。四人も芥川家にお手伝いに行っていたことがわかった。芥川からの書簡でもあるかと静夫氏にたずねたがついぞ見かけないと語った。おそらくは書簡などの手数を要しないくらい出入りが多く、形式ばらず身うち同然の間柄ではなかったかと想像される。こんな関係であるから



力石平蔵

親しい間柄の一人である滝井も「格別な間柄」と言ったのであろう。

次に平蔵の人柄についてはどうか。滝井の言う「控へ目なおとなしい人」、芥川書簡に見られる「正直にして善良なること小生の保証する」人物、「善良なる田舎者」などと評しているところからも察せられよう。ここに掲げた写真はその青年時代のものであるそうだが、なかなか整った顔形で、目鼻立ちの通った美男子で、特に眼元には静かなあたたか味が感じられ、芥川からは文学上のことばかりでなく、全人的に親愛されたことだろうと察せられる。リンさんは夫を他人に語るてらい恥じらいもあり、金に無縁な文学道楽にころんで、一一人の子供を抱えて経済的・精神的に苦しんできた長い人生を辛く思うためか、その口からは余り褒め言葉は聞かれなかったが、総じて無欲でお人よしという印象を強く受けた。

静夫氏の語るところも同じようなものだったが、特に思想面では左がかっていたと言う。「百合」の冒頭に「良平は或雑誌社に校正の筆を握ってゐる。しかし、それは本意ではない。彼は暇さへあれば翻訳のマルクスを耽読し」ては、「薄暗いロシアを夢みてゐる」と書いているが、そんな事実は確認できなかった。しかし、その傾向は近親者の言からも感じられた。読書ではまず歴史関係が好きで、日本の歴史については専門的微細なことにまで精通し、晩年は眼が不自由になったが、中国史などを大字に書き写しては読んでいたと言う。処分した蔵書の中には思想関係のものもあっただろうとのこと。思想的な行動は殆んど目立った行為はなかったが、ある時湯河原町の町政に不明朗なことがあった時、町長リコールの先頭に立ったこと、社会党に入党していて県出身の某社会党代議士とは親交があったと言う。近隣の小田原には平蔵より五歳ほど年上の、社会主義的農民詩人福田正夫（明二六～昭二七）らがいて、「民衆」という同人雑誌を発行して活躍していた。それとの関係の有無をたずねたが、関係はなかったらしい。もっとも、平蔵は詩人ではないようだ、自作の「父と子と」にも詩的要素は皆無といってよい。人間や社会は描いても自然は全くなおざりにしている。芥川によって素材が作品化される過程で、この点への配慮も十分払われたと思われる。また、平蔵の素材提供による芥川の三つの小説には、社会主義傾向など微塵も見られない。少年期への回想を主題とした「トロッコ」「百合」には素材の性質上無理としても、忍苦薄幸な女の一生を描いた「一塊の土」には、社会主義的視点からの取り組みも可能であったはずである。それが見られない。芥川が削ったなどとは毛頭考えられない。「百合」の冒頭は前述のように平蔵の思想や言動の左傾を利用した芥川の、当時のプロレタリヤ派への同調や擬装と解される。それは平蔵の提供した素材とは無縁なものであったろう。私は総合的に見て平蔵の性格は、思想性を上まわる抒情性のため、知性や理性よりも感情や空想の強いタイプと解する。つまり、体質が

思想家的よりも文学者的であったと思う。しみじみと幼時を回想したり、あわれな女の一生を描いてみたり、駆け落ちという一大事を介して父と子の思い合い慕い合う心理を描いたりするところに平蔵の体質があったと考える。そんな平蔵の素材から抒情性を薄めて詩的風韻を添え、理知的屈折を加え、虚無的非情さを点じなどして、芥川は小説形成を試みたのであろう。とにかく三人の近親者の最終的平蔵人物評は「情の濃さとこまやかさと激しさ」だと言う。好きな文学にのめりこんで家や家族をかえり見ないようなところは非情に感じられたが、芯には深い目立たない愛情があったのである。晩年の平蔵で特に目立った点は孫たちへの異常なほどの愛情、盲目的と評してもよいような愛情の持ち主だったとミヤさんは強調して語った。

さて、晩年の平蔵についてさらに一言。若い頃からの文学耽溺から家業をなおざりにして、所々に転住し貧窮な生活を続けていた頃、本家力石家の祖父栄吉は見かねてしばしば経済的援助をしたそうであるが、戦後、現在地に落ちつき、横浜の税関勤めの実弟常吉の世話で横浜の某運輸会社に勤め、自宅から数年間通勤したが、生涯で唯一の職らしい職であったと言う。嗣子静夫氏の起こした建設工業（冷暖房・給排水・ガス・衛生等）の会社は順調にのびているらしく、最近家も壮麗に改築され、子や孫たちの暖かい思いやりの中に気楽な晩年を静かに送り、幸福な生涯を終えたと、ミヤさんは目をうるませて語った。その生涯は情味豊かな性格のままに、好きな文学や歴史の読書に耽り、いかほどかの創作もあったらしいが、余りにも無欲で非自己顕示型な性格のために世に発表することも絶無のままで終わってしまった。あまつさえ、家の改築に際し、本人の承諾もあってそのすべてを処分したので、平蔵の文筆活動を知るべき手がかりは全く失われてしまった。しかし、次の一編の小説だけは奇跡的に世に残った。それをここに紹介しよう。

三　力石平蔵作「父と子と」について

平蔵について調査に赴いた第一回目の近親者との出会いの折、リンさんがふと漏した「文芸春秋」懸賞入選作のこと、その賞金二百円を貰ったことなどを手がかりに、前記のように調査したところ、大正一五年二月号に、広津和郎、片岡鉄兵、藤森成吉、尾崎士郎、中条百合子らの作品の並ぶ最後に「父と子と　力石平三」という見出しで四百字詰二六枚程度の小説が載っていた。紙幅の都合で本文掲載はできないがそのあら筋を述べよう。

場所は蜜柑畑のある海岸の農村（紛れもなく吉浜のイメージ）、主人公は由三という地主の長子で植木好きな若者、名は良作。同村に自作農を営む萬吉（わからずやで頑固で世間体ばかり気にする男）の一人娘お竹との間に恋愛が芽生え、由三は長男と一人娘のとり合わせから難航を予想し、止むを得ない場合は、良作に農地を持参させ生活が立つようにして壻にやっても二人の恋を遂げさせてやらうと決意する。しかし、それをも、世間体にこだわる萬吉は拒み、ついに二人の若者は家出する。親兄弟・親戚は手分けをして探すが杳として行方はわからない。由三は心ひそかには、見つかって仲を裂かれるよりはこのまま見つからずそっとして置きたいと思う。しかし、生苦に窮しているだろうから住所だけは探し出して金品を届けたいと腐心する。年末も迫るころ、良作は父宛に手紙を洋羹と一緒に届ける。その手紙は、親たちに心配をかけたままで年を越させるに忍び得ない、自分たちは達者でいる、夜にまぎれて村に何回も潜入し、両親たちの元気かどうかをかいま見

ては帰っている、届ける洋羹をお竹の父親にも分けて呉れ、といった情のこもった内容のものであった。由三はその消印を手がかりにこの浜辺から西十五、六里の所にある貿易港の町に探しに出かける。その年の蜜柑による全収入を懐中にして。足を棒にして何日も探すが見つけ出せない。そこから六里ほど山合いに入った温泉場で疲れをいやし、持参の金を使いはたして、せめて子のために費消したという気分だけでも味わいたいと。うとうとした気分で温泉宿の二階の窓にもたれていると、「お父っさん」と呼ぶわが子の声にはっとする。良作はこの温泉場に来て空別荘の留守番に入り、別荘や旅館の植木の手入れをして結構気楽に暮らしていたのである。その様子を見て安堵すると同時に、子が親の手を離れて自立した時に味わう親のさびしさや空しさを覚える。そして急に家や妻のことが恋しくなってそこを立った。

端的に主題を言えば、駆け落ちという背信行為の中にあっても、信じ合い思い合う父と子の美しい愛の姿を描いた、と言えよう。外のもの（母と子、男と女、夫と妻…）は一切除かれているが、末尾に父由三が子の良作の自立を見て急に淋しくなり、妻を恋しく思うところには夫婦の関係がキラッと光っている。五、六年前に恋する女性と、先方の親たちの反対の目をのがれて駆け落ちした体験が平蔵にはあったのである。それが基になってはいるが、若い男と女の間がらは全く描かれていない。（察するに平蔵とリンさんの夫婦関係は、駆け落ちまでしてかち取ったにしては、琴瑟相和すというほどではなかったかと推量される）それだけに父と子という関係に心ひかれたのであろう。しかし、その時点では平蔵の父は既にずっと昔に他界している。それがかえって、前述のように情本位な考え方の強い平蔵には、生前に農業への転換を配慮しておいたほどの、父熊五郎の愛情深いイメージは鮮烈であったろう。死別した十四歳の時の少年の心に、実像以上のものとして焼きつき、年と共に大きくなっていたのではなかろうか。そんな父親像を作品に登場させたのであろう。これは芥川の筆が加わっていないだけになまの平蔵の人間像が躍如としている。つまり、亡き父追慕の情が基調となっていると言うことができよう。

文章や表現も平明で、素朴で、淡々としていて、平蔵のそんな人がらそのままの投影が見られる。その点では、文章や表現に繊細な神経をこめ、理知的アフォリズム形式を駆使し、人の意表を衝くパラドックスをちりばめた、いわゆる凝りに凝った芥川の文章とは全く対照的である。朴実な田舎者と洗練をきわめた都会人、そんなところに二人の人間関係を密ならしめる鍵がひそんでいたのかも知れない。相互に影響し合うには余りにもかけ離れすぎた資質であった。それがかような固有の文章を書かせる原因になったのではなかろうか。例えば、次の文章は、この作品で父と子が思いがけなく出会う感動的場面である。

居眠りしてゐた由三は、「お父っあん！」と呼ぶ良作の声をはっきり耳にした。はっと思って眼を覚ましたが、直ぐ夢だったと思った。同時にまた「お父っさん」と呼ぶ良作の声が、今度は確かに前の庭の空あたりからした。由三は驚いて顔を上げた。そして四、五間先の梅の老木の高い枝に良作の顔を見た。「お父さん、分かったかえ」良作の顔が笑って言った。然し由三は其時、大工や佐官の着る印半天の仕事着を着た良作の異様な姿に呆れてゐた。良作は植木鋏を腰に差し、梅の枝へかけた梯子を器用に下りながら、由三を下へ呼んだ。

という文章である。探しあぐんだあげく、偶然宿の二階の窓の前の梅の木に、植木職となって登っているわが子と対面する場面で、行動表現は多くても描写表現は少なく、心情語や修飾句も少なく、それが却

って事の意外さに驚きあきれて一語も発しえないでいる父親の姿を遺憾なく描出している。これが平蔵の人がらで書いた文章である。芥川の文章、例えば「トロッコ」の末尾の「全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出すことがある。全然何の理由もないのに?——塵労に疲れた彼の前には、今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細々と一筋断続してゐる。……」などと対比すればわかる。一見しただけでも、詠嘆があり、繰り返しがあり、疑問があり、倒置があり、象徴があり、新奇があり、多彩な記号の駆使があり、いかめしいような音調があり、いかにも芥川的性格が出ている。互いに対極的な個性、持とうとしても持ちえない相手の個性、魅力十分な相互の個性であり、そんな意味で、芥川こそ平蔵の真の理解者であり、平蔵こそ芥川の真の協力者であったのではなかろうか。

次にこの作品の当時の評価を見よう。掲載誌の「編集後記」に「先に募集した懸賞小説は、応募意外に多数で、締切後にもドシドシやってくる有様であった。その上年末年始で社員が怠けたため、まだ全部読んでゐないのだ。全部読了までまだ時間がかかるので、あまりダラシがないので(ママ)、当選圏内に入ったものを順次に発表することにした。従ってまだ賞金は定めない。最初力石平三氏の「父と子と」を掲載する。……相州足柄下郡吉浜村四二九　力石平三氏」とあり、また、同号の第二次懸賞募集の広告文に「先に募集した懸賞小説のうちで、当選した分はみないずれも相当な好評を博したが、夫等は相当な好評を博したというだけで、堂々その真価をもって文壇を信服せしむる作品が出なかったことは残念である。……」と述べている。また、次の三月号の「編集後記」では、「力石氏の作は一般に好評だった。……」とある。総じては、多くの投稿作品の中から当選作として選ばれ、その当選作の中でも第一号発表作となったのだから、相当な高い評価を得たものと思われる。素材も内容も表現も素朴で地味であるが、しみじみと心に訴えるもの、機微な一瞬をとらえてうなずかせるところがあったのであろう。さらにうがった見方をすれば、当選した作から第一号発表作となりえたあたりには編集同人の有力な推薦もあったのではないだろうか。当然芥川が奨めるか斡旋するかの介入が考えられる。芥川は同誌の編集同人として菊池と親しい間がらであり、同誌創刊以来、巻頭作品は芥川の「侏儒の言葉」の連載であることから芥川が推薦した場合は大きな力になったことであろう。もちろん当選は自力であったろう、また、それにふさわしい作品でもあったと筆者は評価する。リンさんが二百円の賞金を得たというのは、同年四月号に、賞金は差当って五十円を支給していたが「……第一席の人に百五十円追加しようと思ってゐる」と「編集後記」にあるところから、第一等に入選し、百五十円の追加を受けたことになる。その二百円の金はどうしたかとリンさんにたずねたら、そういう話だけで現金は渡されなかったとさも不服そうに語った。

さて、この入選作品だけで、その後一作品も世に出していないのはなぜだろうか。この時二八歳である。まだまだ活力はあったはずである。そこには経済上、家庭上、能力上、性格上などいろいろな理由はあったことかと考えられる。さらに筆者の独断的な想像が許されるならば、この翌年の昭和二年七月二四日芥川は自殺している。余りにも芥川に密着し、芥川によりかかり過ぎていた平蔵は、予想していただろうがその死から大きなショックを受け、芥川亡き後の文学活動にはすっかり気乗りが薄れ、文学に傾倒した生き方をあきらめたのではなかろうか。

四　「トロッコ」への平蔵の不満

平蔵には芥川の「トロッコ」がなぜ「永久に俺のぢゃ無うなった」（純潔）と不満に感ぜられたか。（滝井の言葉を全面的に信じて）いろいろと考えてみよう。提供したと思われる素材は、ストーリーとしては、八歳の良平があこがれのトロッコに乗せて貰い、興に乗じて遠出をしてしまい、夕暮れの道を、不安・恐怖・焦燥・悲嘆…の心情に駆られながら夢中で走り通し、家に飛び込んで母にすがって大声で泣いたとあるが、これはそのまま平蔵の体験であったろう。背景や舞台は、小田原―吉浜間の旧道沿いで、それは、早川口―石橋―米神―根府川―江ノ浦―吉浜といったコースで、さらに門川から伊豆山を経て熱海への道になる。明治二九年ごろ人車鉄道が通り、明治三九年八月湯河原を訪れた独歩はこの人車で小田原から門川に来てそこから人力車で中西旅館に入る。「湯河原の渓谷に向った時は、さながら雲深く分け入る思ひがあった」（「湯河原ゆき」、万葉公園文学碑）とあるのはその時の実感であろう。その二年後の明治四一年からほぼ同じ道筋を軽便鉄道が走る。「良平が八つの年」の頃は、当然その工事が始まっていたと思われる。しかも「トロッコ」が、高低あり、竹林あり、雑木林あり、往きには右手に海の眺望の広い所を進み、茶店などもあるという地形は、今も旧道の所々に面影を残す。そんな芥川の筆致は平蔵に不満はないはず。会話も忠実に土地の言葉を生かしている。ではどこに不満があったのか。全くの私見ながら二点ほどあげてみよう。

第一点は、「父と子と」の作品と対比れすば明らかと思うのだが、文章表現が余りにも完全なものに洗練され、芥川自身のものになりきっていて、平蔵の文体からは完全に離れて、平蔵には他人のもののように感じられたことであろう。

或夕方―それは二月の初旬だった。良平は二つ年下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何処を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし、二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。（「トロッコ」の冒頭に近い文章）

簡潔でイメージも明快、展開順序も正しく整い、一分の隙もなくしかも変化に富み、季節・時刻もうまく生かされ、子供の息づかいまでも伝わってくるような文章である。室生犀星は絶賛して次のように評す。

此描写の中に無駄は一字もない。或意味で写実の奥を掻きさぐるやうなところがある。自分は世に名文といふものは知らないが、恐らく名文といふものには、此種の文章が名づけられてもいいものであらうと思ってゐる。此中には壮麗も見栄も気取りもない。あっさりと余裕のある、まだいくらでも書ける筆勢が見えるやうである。(6)

そこでは平蔵の朴実でヤボ臭い文章は、芥川固有の緻密で一見華麗さを感じさせるものに変えられている。また、即物的でニュアンスに乏しい平蔵の文体は、（吉田精一氏が「ついのり出してしまってからはよもやを頼みにして次第次第に没落の深みにはまって行く、気がついた時には引き返せないものになっている、そういう実人生の象徴」(7)という見方も可能なほど）ニュアンスに富んだものに変えられている。要するに芥川が、平蔵の提供した素材を、平蔵のものとして生かし引

き立たせるようにしてくれるものと、期待していたことが完全に裏切られて、芥川自身のものにすり変えられたことが不満であったのであろう。

第二点は末尾の芥川の書き添えたと思われる箇所（「良平は二十六」…）についてであろう。吉田精一氏はさらに続けて、

この結末の数行は、芥川一流の落ちのにおいが濃厚であるが、これがこの作のテーマになっていると考えられる。心細さに泣きたい気持を我慢しながら、暮れかかる線路みちを、無我夢中で走り続けた幼時の記憶が、雑誌の校正などという、およそはえない末の見込みさえ心細い仕事に妻子を養っている校正係の中によみがえるというのである。…日々たそがれのような薄暗い生活を送っている校正係にふとよみがえった記憶…(8)。

と述べる。往路での期待や歓喜が、帰路では急に不安・恐怖・焦燥・絶望へと暗転し、無我夢中で突っ走り、そして母にすがって大声に泣いた、そのみずみずしく多彩な感情のこもる少年の日の思い出、それがこの書き加えによって、全く無感動で夢も希望もない、灰色の現実の人生において、無意思的に思い浮べられるという設定になる。虚無的人生観の窓口からののぞきの映像に変わる。それゆえこの作品の主題は、人間の現実は塵労に疲れた索莫たるものであり、そんな夢のない中にあって、ふと思い出された、喜怒哀楽、恐怖焦燥といった多彩な感情に彩られた少年の日の思い出、ということになろう。つまり、花のない現実にも思い出の花の咲くこともある、というようにこの作品が虚無的色合いの濃いものになり変わる。平蔵にとってはこの作品素材は、今は（亡き）母や父の心配して待つ暖かいわが家に飛び込んで、恐怖や不安におびえきった体をあたためたという、楽しくもなつかしい思い出であったはず、それが全く変えられてしまったのである。そこに平蔵は、自分のさえない現実を諷刺皮肉られたことへの不快と同時に、期待はずれの作品にいたく失望感を覚えたのではなかろうか。

教材としては、明らかに芥川の加筆と思われるこの末尾を削除したものが多い。この箇所を削除すれば、立派に少年文学となりうる。また、それは平蔵の素材、期待した形態に近いものと評せよう。平蔵の少年像を通してわれわれは少年の日をなつかしみ人間的感情を掘り深めることができよう。その意味で平蔵はうすよごれた大人の文学に変えられたことを嘆き憤ったともいえよう。

五　芥川の「百合」「一塊の土」にふれて

「百合」は大正一一年一〇月号の「新潮」に発表になった、少年期回想の小品で、冒頭は「良平は或雑誌社に……」で、「トロッコ」と同じ名の少年が主人公で、舞台も同じ、内容も同類のもので、分量も同じく一二、三枚ぐらい。いうまでもなく力石平蔵の素材提供によるものである。あら筋は、農家育ちの七歳の良平は、一歳年上で腕力も強く喧嘩好きな隣家の金三と遊び仲間であり、金三が見つけた二本立ちのみごとな百合の芽をめぐって、高鳴る興奮から他愛もないことが原因で二人は取っ組み合いの喧嘩をする、というのである。少年期にありがちなことがらで、心理描写もなかなか確かである。しかし、未完に終わる。多分に平蔵の提供した素材のままといった感じがする。ただし冒頭の「良平は或雑誌社に校正の朱筆を握ってゐる。彼は少しの暇さへあれば翻訳のマルクスを耽読してゐる。…」の部分は、前記のように当時のプロレタリア文学流行に対する芥川の擬装のにおいが強く、その意味では社会主義傾向の平蔵をうまく利用した加筆と解してよかろう。そしてそんな良平も時には百合のみごとな二本芽に興

奮して友だちと取っ組み合いのけんかをした少年時代を思い出すことがある、という展開である。従って構成は「トロッコ」に酷似している。ただ「トロッコ」の「回想→現実」の展開を「現実→回想」へと逆順にしただけである。「トロッコ」の場合は、その間がうまく自然につながっているが、「百合」では「マルクス……」は全く唐突で孤立していて、少年期のなつかしい回想の世界にはつながりにくい。そんな関係で未完とならざるを得なかったのかも知れない。

近親者の言によると、近隣に「金三」に似た喧嘩好きで腕白な幼な友だちのいたこと、家の裏の畑や丘の配置が小説の世界とそっくりであること、「中手十文字」が桑の一種であることは農村人でないとわからないこと、「日金山がくもった」という作中のことばは、「泣きべそをかいた、もうすぐ泣くぞ」の意味で、相手を泣きに誘う子供のはやしことばとして今でも使っているとのこと、用語面では「トロッコ」と同じ土地ことば、例えば「どうね」「……ぢゃあ」「はえ！」「(喧嘩)だくせに」などは普通に用いることばであることなどから、この作品は明らかに湯河原の田舎を舞台にした平蔵の素材提供であること明白。ただし、「今すぐ見にあゆびよう」(行こうの意)は一寸異質で、全集の注は「あゆぶ（歩く）の転か」とするが、この土地では「えーべ」と言うい方があるそうである。「あゆぶ」に近い感じであるが、やはりちがうようである。

「一塊の土」は大正一三年一月号「新潮」に発表。あら筋は、後家のお住の長男仁太郎は八年ほど病んで、妻お民と幼い広次を残して死ぬ。お住は悲しい心境と同時に肩の荷のおりたような安堵感を味わう。はじめは嫁のお民がこの家を出てしまいはしないかと懸念するが残ると知ってほっとする。お民は家のためわが子の将来のため一生懸命家業（農業）に励む。姑のすすめる後夫を迎える話なども軽く受け流して。夫の死後八年もたつころは、村の貞女として小学校の「修身」の話題に上るほどになる。しかし、家の内側では、姑のお住の立場は、初めこそ協力し感謝していたが、お民の働きぶりが男をも凌ぐようになるにつれて、家のうちでのお住の仕事量も増し、不満も高まり、ついに嫁から「働くがいやなら死ぬより外はない」とののしられ、「死んでやる」とわめいて大喧嘩になる。ところが皮肉にもお民の方が村に流行した腸チフスにかかって先に死ぬ。村長以下出席して葬式が盛大に行われた。お住は伜仁太郎の死んだ時と同じように、これでのんびり暮らせるぞといった幸福感にひたるのであった。一面には取り残された孤独感と共に。表向きの貞女を裏側からとらえ直してその悪女ぶりを描いてみせた、つまり、世間の人の立場と、家人である姑の立場、の二つの視点からとらえて、一つの物が全く対極的に見えるさまを書き分けたのである。芥川らしい手法である。大方の好評の中で特に正宗白鳥は、

……殊に「一塊の土」がいい。「地獄変」と相並んでこの作者の全作品中で最高位に立つものである。お民といふ田舎女の忍苦の生涯には作者自身の心が動いてゐる。そして自然主義系統の作家の作品に比べると、秩序整然として冗談がない。私は数年前「新潮」に掲げられたこの小説を故郷で読んだとき、芥川君もこんなに現代の写実に巧みであるのかと感嘆して、直ちに読後感を書いて「文芸春秋」に寄稿したことがあった。しかし、この小説以外の芥川君の作品には殆んど一つも感心しなかった(9)。……

(昭和二年八月軽井沢にて)

と絶賛している。たしかに農村社会の様相、わけても重労働にあけくれて次第に女離れしてゆくすさまじいお民の描写は実にリアルである。

また「秩序整然」とあるが、これもたしかで、貞女を表と裏から、そして、お住とお民の立場を交互に整然と展開させている。ただし、「田舎女の忍苦の生涯に作者自身の心が動いて」とあるがどうであろう。「一塊の土」という題名のもつ無常憐憫のニュアンスからは、忍苦の女のたどる薄幸な生涯に対する哀憐や同情という解釈も可能である。筆者もそれは認めるが、芥川が描こうとしたのはお民の生涯と同時に、それを姑お住がどう受けとめて二人三脚の人生を歩んだかという、お住側の立場からも描いたということである。お民については、仕事の鬼と化して働きづくめの姿を外から描くに終わっているが、お住の立場は、お民の変身に応じて移りゆく心理の変化に重点を置いて描いたと思われる。結末ではお住の自己本位なエゴに視点をすえ、文頭で仁太郎の死の場合に示したエゴと照応させ、それを強調している。実際のところ、主人公はお民なのかお住なのか迷うくらいである。題名が「一塊の土」なのでお民だと決められる。恐らく平蔵が提供した素材はお民の不運な生涯であって、「一塊の土」と言うことばのもつニュアンスの深いものであっただろう。平蔵についてこれまでに見てきた人物像から推しても。受け取った芥川はかれ固有の見方に立ってお住に重みをかけて解釈をしたので、ここに平蔵的「一塊の土」と芥川的「一塊の土」との重なりに微妙なズレを生じたのである。そうした見方ができるからといってこの作品の文芸性を低めることにはならない。むしろみごとな合作として高く評価してよいのではなかろうか。

この作品のモデルについては、静夫氏ら近親者の言によると、全く重なるケースがあると言う。それは系図に示すように、平蔵の父熊五郎の出は吉浜の小沢家（屋号は提灯屋）で、小沢家の人々がそのまま「一塊の土」の人物のモデルになると言う。イセはお住、ラクはお民、市太郎は仁太郎。市太郎の四人の子が小説では「広次」一人になる点だけがちがう。イセは早く夫を亡くして後家となり、長男市太郎はラクを嫁に迎え四人の子ができるが明治四二年九月に死に、残されたラクはしっかり者で男にもひけをとらぬほどよく働き、姑に仕え子を養い、家運をおこしたと言う。その働きぶりは自分の家の農事をすまして平蔵の家の分まで手助けに来たと言う。男まさりのたくましい働きぶりは今も印象に残るとミヤさんは語る。そのラクも夫の死後一一年目の大正九年九月一日に他界する。姑イセは生き残って昭和八年まで生きた。この働き者で薄幸な生涯を遂げた義理の伯母にあたる人をモデルに、平蔵は驚異と同情と顕彰の気持ちを抱きながら素材まとめをし、それを芥川に提供し、前述のように芥川は受けとめ変形したと思われる。

あとがき

この論文の作成については、力石平蔵の近親者（妻リンさん・妹ミヤさん・嗣子静夫氏）の方々から、絶大な協力をいただいたことに心から謝意を表したい。初回の訪問のおり、「だれか今までに力石平蔵さんのことで問い合わせはなかったかどうか」とたずねたところ、「ずっと以前に滝井孝作さんから電話で一度問い合わせがあった、それ以外はない」とのことで、これはいけるぞと意を強うした。しかし、資料も乏しく着手後日時も浅く、十分な調べや深い考究もできないままに原稿締切りも迫り、一応のまとめをしたのが本稿である。今後も平蔵を知るより多くの人々の発言を集め、広く種々の資料にあたり、芥川文学専門の研究家の意見をも徴し、力石平蔵という世に埋れた無名の文人の業績をさらに顕彰していきたいと考えている。大方の批判と協

力とを期待して止まない。最後に旧学友力石久次氏の厚い友情に謝意を表してこの稿を終わる。

（なお、この稿に引き続き、「一塊の土」モデル論を、昭和五五年一一月号「日本文学」（日文協）に発表した。合わせてご批判を乞う次第である。）

（五月三十日）

参考引用文献など

(1)(7)(8) 吉田精一「芥川龍之介」現代文学鑑賞講座（第十一巻）角川書店

(2) 宇野浩二「芥川龍之介」筑摩書房

(3) 海軍機関学校時代の同僚数学科教官黒須康之介宛芥川の書簡　筑摩書房全集による

(4) 芥川文述・中野妙子記「追想芥川龍之介」筑摩書房

(5) 大正一一年一二月一七日付真野友彦宛書簡　筑摩書房全集による

(6) 室生犀星「芥川龍之介の人と作品」昭和二年七月「新潮」

(9) 正宗白鳥「作家論Ⅱ　芥川龍之介」創元社

The Basic Study of "Torokko" by Akutagawa, ——The Sponser of Material about Heizo Rikiishi

Shigeru ISHII*

* 国語国文学教室 (Dept. of Japanese Literature and Language)